

研究ノート

沖縄の綱引きと韓国の綱引き

須藤 護 (龍谷大学国際文化学部教授)
 朴 炫國 (龍谷大学国際文化学部助教授)

日本においても韓国においても、地域固有の文化が存在することは大方認められている。それは生産のあり方や生活の組み立て方と密接に関係しており、多分に自然条件が影響しているとみられる。同じ日本でありながら沖縄、および西南地方は、日本本土とは異なった文化現象を見出すことができるが、興味深いことは、これらの地域と韓国、とりわけ朝鮮半島南部との共通点が多い、ということである。

ここでは「綱引き」という民俗行事を事例にとって、沖縄と韓国の違いや共通点をみていきたいと考えている。綱引きは農耕儀礼の一つとして古くからおこなわれている行事で、韓国、日本、沖縄で今日なお継承されている。そのほか中国や東南アジアにも同じような事例があることが知られているが、各地(各国)の綱引きに関する総合的な研究は今後の課題になる。今回は沖縄の綱引きに関する調査資料を整理して、今後の研究のための基礎資料としたいと考えている。

調査は1998年10月3日から8日までの予定で行なった。10月3日午後には沖縄県糸満市に到着し、その足で市役所を訪問、調査の目的を伝えて綱引きに関する資料をいただいた。その後行事の準備が行なわれている白銀堂に向かい、清掃をしている役員(総代)の方々や、カヌチ棒を保管するために白銀堂にやってきた若い人々にお会いすることができ、私たちがこの行事を見学しやすいように配慮してくれることになった。カヌチ棒は雄綱と雌綱を固定して1本の綱にするための棒である。その後4日の夜まで綱作りなどの行事の準備と予行練習の様子を見せていただいた。

ところが、本番である10月5日(陰暦8月15日)は朝早くから大雨に見回れた。綱引き行事は10月10日に延期になり、糸満地区の綱引きは私たちが滞在中に見ることができなくなった。幸い翌日の6日に、同じ糸満市の真栄里で綱引きが行なわれることを知り、これを見学することができた。また、糸満大綱引行事委員会の上原義隆氏より、大綱引き関係の貴重な資料を

提供していただき、これを参考にさせていただいた。一方韓国の事例については、1996年以来継続している調査資料の一部を参考にした。

1 糸満市糸満の大綱引き(糸満大綱引行事委員会提供の資料による(1))

(1)村御願(ムラウグワン)まで

沖縄各地で行われる綱引き行事は、旧暦6月15日の6月御祭綱(ウマチージナ)、同25日のカシチージナ、7月15日の精霊御送り綱(ウウクイジナ)、8月15日の十五夜の綱(ジューグヤーヌチナ)などがある。これらの綱引きは、神に今年の豊作を感謝し、来年の予祝を行なう行事である。かつては糸満でも水稲が栽培され、旧暦の6月には新米がとれた。その収穫感謝祭が6月ウマチーである。稲作が行なわれなくなった今でもウマチーは村の神人(カミンチュ)によって、白銀堂(イーピンメー)を中心に嶽々(タキダキ)、殿(トゥン)などの拝所(ウグワンジュ)でもようされている。

6月25日には新米の糯米で強飯(カシキー)を炊き、先祖に供えて6月25日折り目(ルクグワチニンジューグニチウイミ)を祝う。戦前はこの日に子供たちが農家から藁を集めてきて、大人に小さな童綱(ワランカージナグワー)をつくってもらって引いたという。また7月の七夕の精霊お取待(ソーローウトウイムチ)があり、15日には御送り綱(ウウクイジナ)を引くところがあるが、糸満では行われていない。

8月に入ると10日までに屋敷の拝み(ヤシキヌウグワン)を行ない、10日の柴さし(シバサシ)で封をする。これは家や屋敷の中心(ナカジン)、門(ジョー)、四隅(ユシン)などを拝み、家、屋敷の霊力を堅固にするというものである。そして、封印としてススキ(ギシキ)と桑の小枝と葉(クワーギヌハー)と束ねて先を十字に結んだ柴を出入口や屋敷の四隅、家の軒や食物を入れておく容器、井戸などに差す。また寺院の封札(フーフダ)を購入し、家の外側の出入口、四隅、便所などに木札を打ち付け、内側の柱や中心には紙に書かれた札を貼る。また10日には、8月御祭り(ハチグワッチウマチー)が各腹ごとにもようされる。これは選擇する場所を冠して「ウーモーグワチウマチー」とか「アミクウマチー」、「ナキギンウマチー」と称して

いる。クディングワが白銀堂(イーピンメー)を拝み、御嶽(ウサーン)や大毛(ウーモー)などの小高いところに設けた各腹の遥拝用の香炉(ウトウーシウコール)から天久のサキヒジャーや今帰仁を遥拝する。本来は14日に行われていたが、綱引き行事と重なることから10日に行なわれるようになったという。

11日は折り目(ウイミ)で、小豆入りのおこわ(赤ガシキー)を豚肉の汁(シシンスル)を先祖に供え、香は供えずに拝む。12日の朝、白鳴らし(ウーシナラシー)という行事があって、前日のカシキーの残り飯を臼で搗いて片手で握ったにぎりめしを先祖に供え、残りを屋根の所々においた。

(2)村御願(ムラウグワン)

さて、いよいよ13日から十五夜に向けてムラウグワンが行なわれる。初日の13日は午前中に神人(カミンチュー)のキリンソーヌウグワンと各区の総代(スーデー)によって、白銀堂(イーピンメー)境内と周辺の清掃が行われる。清掃が済むと次に境内に白砂を入れ、鳥居に綱を巻き、堂にはナナヒザをつけた縄をかける。午後は三日崇への拝み(ミキタカビヌウグワン)が行なわれる。総代は綱引きが終わるまで、終始白銀堂に詰めることになる。以前は白銀堂で寝泊まりしたというが、現在は扉を閉めて家に帰っている。夜になると周辺の主婦やおばあさんたちが、神を慰めるということで、夜伽(ユートウギ)に訪れる。神歌が歌われ、ユートウギは13日、14日の両日夜遅くまで行なわれる。

2日目の14日は、午前中二オ小結(ニーセーグワユーイ=成年式)が行なわれる。これは男子が数えの13歳に達し、糸満の成員となったことをイーピンメー

に詣で、神にそのことを告げ、祝女(ヌル)の祝福を受ける。この儀礼は糸満独特のもので、他の地域では見ることはできない。午後の儀式には字大里の神人も参加する。イーピンメーの祭壇には、ミキ、餅、魚のシラベシ、豆腐のンプシムン、さしみ、御供飯(ウグフアン=米を盛る器)を供え、ミキザン3本と藁算(ワラザン)を3本立てておく。ミキザンは献納される御酒(ミキ)の量を計るもので、稲科のダンチク(デーク)の幹で作ったもの。藁算はミキの量を記録するものである。この二つは杓取り(ニープトウイ)である大殿内(ウードウンチ)の当主が13日に作っている。儀式は境内の拝所(イビ、タキ、ニーヌワヌガー、ナカヌカー)に香と花米、御酒を供え、それぞれを拝み、杯を交わす。

次にユノーシハーシヌウグワンがある。これは白銀堂の堂内において、総代9人が協力して行う。太鼓(シジン、チデンともいう)を打つ3人、御酒(ミキ)を捧げもつ人3人、手をたたく人3人で、はじめに太鼓を打つ人が「ユノーシ」といってポンと打ち、次に手をたたく人が「ハーシ」といって手をたたく。このよ



うな仕草を3回くりかえす。ひととおり拝みが済むと、大里側の神人が杯を交わして引きあげる。糸満側の神人は、ウサーン、ジーピンメー、スーシ、殿内屋(トゥンチャー)、ヌンドウンチで儀式を行う。ウサーンはウタキでスーシは竜宮とも称し海神を祭る祠である。2日目も夜伽(ユートウギ)が行なわれるので、村瓶(ムラビン)は白銀堂に供えておく。

(3) 綱引きの当日

綱引きの当日である15日は、威部神(イビシン)に2日目と同様の魚や豆腐のンプシムンなどの供物を供える。この日の儀式は「チナヒキヌ、ムッキリヌウグワン」といって、神人や総代らが出席して行なわれる。村瓶(ムラビン)で白銀堂境内の拝所に香と酒を献じ、それぞれに「今日は雌雄の綱を引き合う日である。無難に、見事に引かせていただけますように(クーヤ、ウーナ・ミーンナヌ、ムッキリヤイピン。ムナンジュラク、ヒキジュラサ シミティクインソーリ)」と祈り、杯を交わす。総代は代表が神人から杯をいただく。供物は皆でいただく。

午後は神人や総代等は身支度を整えて、行列(スネー)を迎える。神人は奉納が済むと次の儀式をおこなうため、白銀堂の裏門を出たところにあるアーマングワーへと向かう。男性神人は表門から出るが、女性神人は裏門から出る習わしである。そこでの儀式を済ませ、町の井戸(マチンカー)近くの広場へと急ぐ。ここでは「ムッキリヌウガミ」といって、山顛毛(サンティンモー)へ遥拝し、綱が無事に引き終わることを祈る。そして、綱が引き終わるまでの間はここで待機する。かつては茂太という家から筵とモヤシの和えもの(マミナズネー)が提供された。これに対して、返礼として村瓶(ムラビン)の片方の酒が送られた、といわれる。

綱も無事引き終わると、町門(マチンジョー)で、チナヌクチンナヌウグワンが行われる。かつては貫抜口(カヌチグチ)にカヌチ棒が抜かれたままカヌチが切り落とされ、そのまま浜に流されたという。現在は儀礼的にカヌチ棒を流すふりをするだけである。行事の最後はヌ殿内、根人(ニーチュ) 大殿内を拝み、無事に綱が引き終えたことを報告する。また、各門々(ジョーグワー、ジョーグワー)では、主婦らによって門拝み(ジョーウグワン)が行われる。そして後遊び

(アトゥアシビ)を楽しむころはすっかり暗くなっていた。

白銀堂では8月13日と14日の夜に夜伽(ユートウギ)に祭歌が歌われる。それはウシデークとそのちらしのスヤースヤーの歌で、踊りはない。ウシデークは中山王である首里天加那志の御世を讃えつつも、糸満の神であるイビガナシの按司のお乗りになる馬を賞賛し、神や按司の世界が広々と鮮明であり、これを祭る神子(クディングワ)の真筋も同様である。また、糸満の語源ともいう勢理の井戸(シリーカー)の糸と繭に、イビガナシの御加護を託し、栄えゆく糸満の原理は港にありとし、これからの糸満を担う若者の姿を8月14日の二オ小結を様子でまとめている。スネーで歌い踊るソーンソーンという歌もある。

2. 綱引きをめぐる習俗

(1) 綱引きがおこなわれる日

綱引きはこの年の豊作を祝い、翌年の豊作を期待して祝う予祝行事である、といわれている。ここで沖縄(糸満)と韓国(全羅道)の綱引きを比較してみようと思う。まず綱引きをおこなう日と神様の問題である。すでに述べたように、沖縄で綱引きがおこなわれる日は旧暦6月15日の6月ウマチージナ、同25日のカシチージナ、7月15日の精霊御送り綱、8月15日の十五夜の綱などがある。このほかに正月綱といって、正月の間に綱引きがおこなわれていたようであるが、この時期は作物の作付けや収穫の折り目ではなく、その事例も多くない(2)。また8月10日は家屋敷に柴を差し、霊力を堅固にする習慣があるが、この日に綱引きをする地域もある。

現在の糸満地区は、稲作の栽培はさかんではないが、かつては稲が栽培され、旧暦の6月は新米がとれる時期であった。その収穫を感謝する祭が6月ウマチーである。稲作が行なわれなくなった今でもウマチーは村の神人によって、白銀堂を中心に嶽々、殿などの拝所で祭祀がおこなわれている。また、6月25日には新米の糯米で強飯(カシキー)を炊き、先祖に供えて6月25日折り目を祝う。戦前はこの日に子供たちが農家から藁を集めてきて、大人に小さな童綱つくってもらって引いたことはすでに述べた。7月の七夕の精霊お取待があり、15日には御送り綱を引くところが

あるが、糸満では行われていない。

これに対して韓国の綱引きは、稲作が優先する半島南部に濃厚にみられ、北にいくにしたがって、その密度は低くなる。その日程は旧暦の小正月におこなわれる事例が多く、年占いの儀礼(予祝儀礼)としての性格が強いようである。各村には村を守っている堂山(タンサン)という祭祀の場があり、人々の信仰の中心になっている。タンサンは村の入り口に祭られている先祖神で、ふつうおじいさんとおばあさんが一対で奉られていることが多い。綱引きの前にタンサンにたくさんのお供物を捧げ、豊作の感謝をするとともにこの年の豊作を祈願するのである。出来上った綱を村人が担いで村を一周するところもある。綱自体が神となって、村の中を回っているようである。その後綱引きをする。

綱を引くときには太鼓、鉦、ドラムなどの楽器を持った人々が音楽を奏で、踊りを踊りながら雰囲気盛り上げていく。これをサムルノリといい、行事があるときにはこの楽団が必ず出演する。綱引きが終わった後に、稲の取り入れが終わった水田の中に入って、長い綱を持って村の役員たちや楽団の人々を取り囲むようにして追いかけて回す村もある。田遊びという言葉がぴったりするような遊びである。引き終わった綱は堂山に持ち帰って御神体に巻き付け、堂山祭をおこなう。この祭りは綱引きが無事終わったことを神に報告しているように見える。

(2)綱引きが意味するもの

綱引き用の綱は藁で作る場合が多いことから、稲作との関わりが深いことは充分考えられることである。豊穰と平安を願う農民の心は、雌綱の中に雄綱をとおり、糸満地方ではカヌチ棒とよばれる棒でしっかり固定して1本の綱を作る、という行為の中に象徴的に表れている。男女の生産的な力が藁(綱)に託され、より多くの生産をもたらしてくれる、という思いが行事の中に込められているのである。この思いは沖縄においても韓国においても同様で、韓国の全羅道地方でみた綱の作り方と、糸満での綱の作り方、および雄綱と雌綱を結合して1本の綱にする方法は、大筋において同じであった。

また綱の引き方にも共通した要素がみられる。糸満の場合は綱引きに参加する地区は旧糸満町の人々で、今日では新島区、前端区、南区、新川区(以上南組)

西川区、西区、町端区、上三平区、新屋敷区(以上北組)の9区に分かれている。この北組と南組に分かれて綱を引き合うのである。また同じ糸満市真栄里の場合は、東方と西方とに分かれて綱を引き合う。この場合東は男、西は女という考え方があるようである。韓国でも同様で、いくつかの村が東西に分かれ、また村の中で東西に分かれて綱を引くところもあるが、いずれも東が男で西が女を意味し、西が勝つことが多いようである。また男女が分かれて綱を引く場合も少なくない。この場合独身の男性は女性側の綱を引く。いずれも女性が勝つと豊作という地域が多く、ふつうは女性が勝つようになっているようである。いずれもこの行事が豊穰、および平安をつよく象徴しているように見える。

その考え方をよく表しているのが綱の処理の仕方である。韓国全羅南道金堤近郊の農村では、綱引きが終わった翌日に、村内にある男根型の立石に綱を巻きつけておき、翌年の綱引きのときにこれを焼却し、新しい綱を巻くという。この習俗は全羅道各地にみられるもので、金宅圭は「明らかに性器崇拜と関係のある性行為の模倣呪術であろう」と考えている(3)。

沖縄も古くから稲作がおこなわれてきた地方であるが、これと違った綱の処理をしているところが興味深い。かつては綱の貫抜口(カヌチグチ)にカヌチ棒が固定されたままカヌチが切り落とされ、そのまま浜に流したという。現在は儀礼的にカヌチ棒を流し、すぐに引き揚げるのであるが、この綱の処理の仕方に象徴されているように、雄綱と雌綱が結合された状態で海のかなたの神に奉納する、という海洋民的な考え方が表れているように思われる。その一方で綱の本体は、農耕に必要な堆肥として持ち帰る人や、綱引きに参加した人々がお守りとして家に持ち帰るといふ。糸満では稲作農家が減少し、漁業に携わる者が多くなっているにもかかわらず、他の地方から大量の藁を購入して、綱引きが盛大におこなわれている。農耕儀礼として始まったとみられるこの行事が、生業の形態が変わった現在なお、重要な祭事として定着しているところに、稲作と海洋文化(漁撈)との深い関係を見出すことができそうである。

(3)今後の課題

以上簡単に沖縄と韓国の事例を見てきたが、綱引き

は日本本土や九州でもおこなわれている。ここで問題になることは綱引きがおこなわれる日のことである。沖縄では6月、7月、8月が中心になっているが、韓国と中国、日本本土、とくに近畿地方以東は小正月が中心になっている。また北九州では旧暦8月の十五夜に、南九州ではお盆に綱引きが行なわれることが多いようである。この違いはどこからきているのであろうか。綱引きが農耕、とくに稲作との関係が深いのであれば、その作付けや収穫の時期、そして農耕儀礼にたいする人々の考え方について、追いかけていく必要を感じる。

また、綱引きは東アジアから東南アジアまで分布を見ていることが知られているが、その起源や広がりかたについても興味深いものがある。中国では揚子江流域を中心とした地域に綱引きがあったことが記録にみえているという(4)。この地域は朝鮮半島南部と同様、稲作が優先する地域である。また、カンボジアにはアンコールワットという寺院遺跡が知られている。この寺院の回廊の壁面に、神々と阿修羅が綱引きをしているレリーフが残っている。その綱引きの中央にるのが、ヒンドゥー教の神の一つであるウィシュヌという水の神である。ウィシュヌ神の妻はスリーといい、この神はインドネシアのバリ島では、稲の神として水田の一角に奉られ、大切にされている。いずれも稲作と綱引きとの関係の深さを示唆しているように思える。今後の課題として追いかけてみたいテーマである。

<参考文献>

- (1)糸満大綱引行事委員会 『糸満市糸満の大綱引き』
1998
- (2)平敷令治 『沖縄の祭祀と信仰』 第一書房 1990
- (3)金宅圭 『韓国農耕歳時の研究上巻』 第一書房 1997
- (4)同上